

FileNo. 7 一般財団法人 たんぼぼの家

福祉事業を行う団体はたくさんありますが、たんぼぼの家はそのなかでも、福祉とアートをつなぐ分野を切り拓いてきたリーダー的な存在だと思っています。これまでの実績や知名度を背景に、すでに構築していたネットワークを使ってアンケートを実施し、今回の助成を受けてその結果を活用し発信したというのは、さすがだと思います。

素晴らしい活動をされている団体だということはよく知っています。そのうえで一点だけ言わせていただくと、ホームページを見てもご紹介いただいた冊子がなかなか見つからないことがもったいないと思いました。「助成を受けてこういった良いアイデアをたくさん集めたものを作りました」ということを、ホームページを開いたときにパッと見てわかるようにされるといいのではないのでしょうか。(吉田忠彦)

FileNo. 8 株式会社 リリムジカ

オンラインで、こういうこともできるんだなというこの発見がありました。そもそもの出発点が「介護してあげる」ということではなく、「一人一人への尊厳を大切に」「かけがえのない存在に対峙する」というところにあることが、この活動に深みを与えていると感じます。今回の取り組みによって、ただ音楽を聞いて、ご家族にも喜んでもらってよかったというだけでなく、ご家族がその場で一緒に参加しながら、その方が人生を振り返り、楽しむ様子を可視化できる場にしていました。おばあちゃんがどういふ人生を歩んできたのかということが、音楽を通じて「見える」ことで、家族も共有できることが素晴らしいと思いました。あらためて音楽はいいものだと実感しました。

他の団体との連携も素晴らしかったです。遠くにある団体ともつながって様々なサービスが提供できるという、今までは考えられなかったことが実現されていることを目の当たりにしました。これはぜひ本格的に全国展開をしてほしいと感じています。(松井真理子)

FileNo. 9 有限会社 ミューズプランニング

コロナ禍だけでなく、熊本県は地震や毎年のように水害が起こるなど、他の地域以上に厳しい環境であったと思います。そのようななかでも、工夫をしながら力を合わせて活動を続けた姿勢にとっても感動しました。本来やりたかったことがうまくいかなかったときに、あれこれ考えながら、やむをえずではありますが、形を変えて事業を続けたところがとても良かったと思います。できなかったことがあったからこそ、本来自分たちがやりたかったことはなかったのかを、あらためて問い直すことができたのは、とても大事なことでした。

もう一つ感じたのは、LINEを活用したことが非常に効果的だったのではないかとことです。一般的にも、直接会っている人よりもLINEで毎日のようにコミュニケーションをとっている人のほうが、より深いつながりを感じるということがあります。そういった意味で、今回の事業でLINEを活用したことが、今後の活動や社会のあり方の一つのヒントにもなるのではないかと、と思いました。(吉田忠彦)

2021年12月12日にオンラインで行われた「NPOが生み出す新しい活動様式 成果報告会」にて、伴走支援者の先生方から各団体へ送られたコメントを収録しています。各先生の総評はp.119からをご覧ください。

FileNo.

10

特定非営利活動法人 福祉サポートセンター
さわやか愛知

「ITに苦手意識の強かったスタッフたちが、
コロナをきっかけにスキルをアップ。
”対面とオンラインのいいところ取り”の
サービスを提供できるように」

さわやか愛知は、
利用者の方々や受講生の立場に立った
サービスや講座を行っていましたが、
コロナ禍でできなくなったことがたくさんありました。
それを乗り越えるにはITの活用が必要と考え、
「ITに苦手意識の強かったスタッフたち自身が、
研修を重ねることで、使いこなせるようになり、
対面とオンライン
どちらでもサービスができるまでに成長しました。」



お話を聞いた方

理事長
川上 里美

事業名

地域におけるオンライン
研修の活用の推進

-スマート機器を活用したい市民の応援-

Webサイト <https://www.sawayaka-aichi.com/>

事務所所在地 愛知県大府市



これまでの
事業展開

**コロナ禍でも利用者数が増えたほど、
地域のどんな「困った」にも対応してきた**

さわやか愛知は、「なんでもやります！」のたすけあいの精神で、「暮らしのお手伝いまるごとします」をキャッチフレーズに、地域の方々誰もがハッピーで安心して暮らせる社会を目指しています。そのために、地域支援を目的に建てた施設内でのデイサービスを始め、子育て支援や介護・福祉の様々な講座運営など、いろいろな活動を行っています。

私たちは、利用者にとって何がいいのかを一番に考え、たとえば建物内のデイサービスのレイアウトや動線も工夫しています。コロナ禍でも、建物内がゆったりして密になりにくいように思われたのか、もとの利用者の方に加えて新しい利用者の方も受け入れることになり、全体の利用者数はコロナ前よりも増加した月もありました。

ただ、新型コロナウイルスの感染拡大によって、これまでのような活動が制限されることになってしまいました。そこで、オンライン活用の推進やデジタルツールを活用した地域の方の応援など、デジタルツールを使った活動の必要性を強く感じるようになったのです。

**コロナで対面での活動が制限されIT活用の必要性を痛感。
でも、一番の課題は自分たちのITスキルの低さだった**

コロナ禍で
見えた課題

ITの活用を実行する以前に壁となったのが、自分たち自身のITスキルの低さでした。デジタルツールに関して誰もが不慣れであったうえ、スタッフの多くの年齢層が高いため、ITに対しては非常に苦手意識が強く、デジタルツールの扱いに対して抵抗感のあるスタッフが多かったのです。もともと私たち自身が、活動は対面が一番と思い込み、それが正しいのだと自分に言い聞かせてIT関連とは距離を置いていたという面もあったかもしれません。

そのため、コロナ禍で対面での活動ができないならオンラインで何かをしようと思ったものの、どうしたらいいのかわからなくて、困ってしまっただけです。ここで初めて、デジタルツールを使うことから、オンラインで講座に参加したり、様々なことにチャレンジしていく必要性に気がつきました。つまり、コロナ禍での社会や地域の課題に対応する前に、まず自分たちのITスキルの低さを解決しなければ先に進めないことが大きな課題とわかったのです。

**利用者の方もスタッフも楽しみだったことや理想としていた活動が、
コロナ禍で実行不可能に**

一方、コロナ禍での実際の活動では、ボランティアの参加が難しくなったため、これまで行っていた様々なイベントや行事などを中止せざるをえなくなっていました。こうして、デイサービスの利用者の方の楽しみが少なくなってしまったという当然の課題が出

てきました。

さらに、さわやかデイサービスではビュッフェ形式で好きなものを選んで食べることができるランチが人気でしたが、感染対策のために定食形式にするしかなく、地域の方やボランティアの方、一般の方がおしゃべりしながら利用者の方々と一緒に食事をするという楽しみもなくなってしまいました。このように、私たちが理想としてやってきてうまくできていたことが、コロナ禍になって次々できなくなってしまったという課題もありました。

助成金で
トライしたこと

「未来に行くために」に**「未来に行くために」に** 地域の方にデジタルツールの使い方の講習会を開催。 理事長を先頭にスタッフが一同がIT研修に挑戦！

以前から、さわやか愛知で講座を運営している養成教育部で、誰にでもわかる授業をするには映像がもつと必要ではないか、という声がありました。そのこととコロナ禍でITを活用する必要に迫られたタイミングが合い、変化する世の中に対応して「私たちも未来に行かなくては！」と、今回の事業に参加することにしたのです。

そこでまず、自分たちのITスキルを上げるために「**「未来に行くために」に** 地域の方にデジタルツールの使い方の講習会を開催。」を立ち上げ、デジタルツールを使うための研修を開始しました。スタッフの多くが、初めてのタブレットやZoomへの挑戦を開始しました。この研修は、最初は3名のアドバイザーに教えてもらったり助けてもらったりしながら始めたのですが、見よう見まねで徐々に、自分たちで実

際に使ってみながらタブレットなどの操作を覚えていくようにしました。この取り組みには、81歳の理事長が率先して参加し旗振り役となってくれたので、スタッフも自然と積極的に取り組む雰囲気になっていきました。おかげで、最初は「ITは苦手」と言っていたスタッフも、研修の回数を重ねることに操作に慣れていくことができました。まさに、「習うより慣れる」という言葉は正しいと実感した出来事です。

また、やがては事務所以外でも仕事ができる態勢を見据えて、スタッフの家などいろいろな場所からも研修や打ち合わせができるようにし、家族や友人と一緒に研修に参加してもらい、ゲーム感覚で楽しみながら体験してもらうように工夫しました。

地域の方にデジタルツールの使い方の講習会を開催。 地域の方にデジタルツールの使い方の講習会を開催。

地域の自治会や老人クラブ、婦人会など、公民館主催で講座を6回行い、スマートフォンやタブレットの使い方の講座を開催しました。講座はとても評判が良く、今では来年度の依頼も続々と入ってきています。

さらに、施設の中にスタジオを作って実際にITの活用に挑戦しました。このスタジオや**「未来に行くために」に** 地域の方にデジタルツールの使い方の講習会を開催。

一方コロナに関しては、正しい知識を得るための研修会を開いたり、感染対策などについて伴走支援のドクターに相談に乗ってもらい、勇気をいただきました。

課題をどう
乗り越えたか

「“人”を大事に」との理念から、スタッフの意思を確認。全員が続行を希望し、コロナ禍でも前進することに

さわやか愛知の活動を続けていくうえでは、“人”を大事にすることが一番大切だと以前から思っていました。災害やトラブルなど、何かあってもまずスタッフを大事にしていたら、スタッフは利用者を大事にしてくれますし、活動もうまくいくことがこれまでの経験からわかっていましたからです。

コロナの感染が広まってきた時にまずしたことが、今後の活動についてスタッフに意思確認することでした。するとうれしいことに、全員が「コロナ禍でも活動を続けたい！」という強い思いをもっていただくことができました。そこで、どうしたらスタッフと利用者の感染を予防しながら安全に活動が続けられるか、コロナの実態や感染の現状、予防などについてみんなで勉強しつつ、試行錯誤しながら「前に進んでいこう」とスタッフの気持ち一つになりました。

「利用者からの依頼は断らない」という思いが、背中を押す形でITにも挑戦

ITの研修に関しては、最初は尻込みしていたスタッフも少なくない、という状態からのスタートでした。そんな私たちの気持ちを奮い立たせたのが、スタッフそれぞれが持つ

ている活動に対する強い思いです。

私たちには、「100人いたら100通り困りごとがあるから、一つひとつうちがやれるものはやっていこう。もしやれないことがあったら、他の団体などを紹介してつなごう」という思いがあります。さわやか愛知のスタッフには、「地域の方からのどんな困りごとにも、断らずに引き受けよう」という気持ちがあります。理想とする活動を行うためには、ITからも逃げずにみんなで一緒に勉強し覚えていこう、という気持ちを共有でき、なんとか前に進むことができたと思っています。

「未来へ行くため」IT化を進める



初めての
タブレット
初めての
ZOOM



スマホ講座



↑コロナ前↑ と ↓コロナ後↓の教室の様子

これからの課題

オンラインを利用した様々なツールの可能性を探り、
活用法を考えていくこと

コロナ禍になったからこそ、新たな取り組みが始まった反面、目標としたことは達成されていないこともあります。特に、オンラインを用いた活動はまだです。オンラインには様々なツールとして応用できる可能性も感じました。そこで、今後もオンラインを何かすやり方を考えていこうと思っています。

たとえばひとり暮らしの方にお弁当の配達を行った際に、オンラインで一緒に食事をしたり、会員登録をオンラインでできるようにしたり、利用者と遠方のご家族をオンラインでつなげないか、といったことを考えています。これらは、やり方を模索しながら今後も挑戦していくつもりです。

ただ、利用者や受講生のなかにはやはり対面のほうがいい、という方もいらっしゃるので、選択肢を増やしていろいろなやり方が選べるようにして対応していきたいです。「どちらでもできます！」と言えるようになるのが理想です。

スタッフたちがITに挑戦してスキルが上がり、オンラインと
対面のハイブリッドな活動ができるようになった助成金があった
からできたこと

ITに向き合う必要性を感じていたときに、コロナをきっかけに助成金を得て、タブレットを選ぶことから始めてみんなでデジタルツールに親しむ研修会を開くことができました。最初は、デジタルツールの操作やオンラインの活用に抵抗感のあるスタッフが多かったです。研修を重ねるにつれて徐々にタブレットやスマートフォンなどのデジタルツールやZoomを使いこなせるようになっていきました。おかげで、対面とオンラインのどちらも選べるハイブリッドで介護・福祉の資格取得の講座もできるようになったのは、今回の助成による大きな成果と思っています。また、スタジオを作ったことで、地域の方も巻き込んで様々な内容のたくさんの方の映像を制作することもできました。

ただ、介護技術研修のように、これまでどおり対面で行ったほうがいいこともあります。そこで、今後は活動の内容や利用者の方や受講生の希望などを聞きつつ、対面とオンライン、対面と遠隔の「いいとこ取り」をしていき、さらに地域の役に立てる活動をしていきたいと思っています。